

○キビノクロウメモドキについて (榎山泰一) Yasuichi MOMIYAMA: *Rhamnus Yoshinoi* is *R. Schneideri*

キビノクロウメモドキ (*Rhamnus Yoshinoi* Mak. 1904) は、わが国では稀産の一種に属し、わずかに備中と肥後とにその産地が知られているのみである。クロウメモドキなどの近似種からは、枝が帯紫色なのですぐに区別されるが、朝鮮に多いヤブクロウメモドキ (*R. Schneideri* Lév. et Vnt. 1908) も枝が紫で、キビノクロウメモドキに近縁なことを思わせる。そこで両者を比較して見ると、單に枝の色のみか、葉も花も実も酷似しており、帯紫色の小枝、倒卵形の楕円を帯びた互生葉、雄花における狭倒円錐形のほそい(雌花では倒卵球形の)萼筒、それを超える披針形の狭長な萼片、果実の時に1cmを超える瘦長な花梗等の、主要な特徴がみな一致するし、果実や分果の形状までも相違がない。次に両者の相違点は、東大の標本によると、ヤブクロウメモドキの花柱が2岐するのにキビノクロウメモドキのそれが3岐すること、前者の萼片がより著しく反捲すること、前者の雌花に4箇の絲状の小花瓣が立つのに後者の雌花にはこれを欠くかこれを欠かないまでもその数が不完全であることなどである。しかしこれらの相違は、多数の簡体を檢した上でないと、常にそうなのか否か確言できないし、萼片反捲の度も、花の時期による相違以上の意味があるかどうか疑問である。それに、花柱分岐の数のある範囲内での変化や、雌花の花瓣の有無多少などは、この属では、種内の差違にしかすぎないのは、クロウメモドキその他の種類でも知られた事実であるから、それらをあまり重視することはできない。そうすると結局、両者は、別種にしておくより同種にする方が妥当なように考えられる。さらにその分布を見ても、キビノクロウメモドキは、上にも述べたように、わが国の西部、地理的には朝鮮に近い地方に見出される。それは、ヤマトレンギョウ (*Forsythia japonica* Mak.) やシラガブドウ (*Vitis amurensis* Rupr.) の在り方に似たところがあり、これを大陸と共通の要素(或は種類)と考えると、その特異な分布の意味をよりよく解釈することができると思う。

○武蔵野のシラカンバ (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Lowest habitat? of *Betula platyphylla* in Kantō, Japan.

昭和28年6月20日東京都の西北部練馬区大泉学園町の田園地帯を歩いていてシラカンバの幼樹に出会った。高さ1m許り7~8年生と思われる。土地は海拔50mローム台地上の路傍で築堤の陰になったところ、恐らく西北方の秩父から空つ風に乗つて来たものか。

正誤 Corrections (Vol. 28, No. 5)

p. 153 l. 6 for inciso-dentata, read inciso-serrata

p. 154 l. 12 for l.c., read in Bot. Mag. Tokyo 46: